

# チュートリアルの本棚

## チューター教員からの推薦図書

次の計算は何を求めているでしょう？

$$0.148 \times 0.210 \times 300 \times 1,940,000 = 18,088,560$$

この値の単位はm<sup>3</sup>です。よく使う教科書のA5判（148mm×210mm）、よくある頁数300に中央図書館に所蔵の約194万冊を乗じました。総頁数の概算面積と言え、つくばキャンパスの面積約2.6km<sup>2</sup>の7倍弱。この広大な面積に活字や図が印刷されています。膨大な知識の宝庫ここにあり、ですね。

読書とは、その宝庫から知識を得る営みです。どんな本から読み始めたらよいのか、そのきっかけ掴みはなかなか難しいでしょう。「学問探究チュートリアル」では、自分が面白いと思えることをどう見つけ、掘り下げるかを学びます。その道は人の数だけあり、どんな本がどのように役立つかも人それぞれです。そこで、チューター教員の経験上お勧めしたいと思った本を、口上とともに展示してみました。本を手に取り眺めてみることも、自分の面白い探しの一助になればと期待しています。

坪内孝司

（学問探究チュートリアル実施委員長）

書籍名	著者名	推薦教員名	推薦教員からのコメント（50～200字程度）
1 インティマシーあるいはインテグリティー	トーマス・カスリス	大庭 良介	なぜ、西洋人は日本文化を、日本人は西洋文化を、その本質において誤解するのだろうか。そこには、認識の前提となるモノコトの見方の違いがあった。
2 眼には眼を	ケン・ウィルバー	大庭 良介	我々は認識のための3つの眼をもっている。狭い科学の眼は限られた認識範囲には有効だけれどモノコトの外面しか見てとれない。科学主義が瞑ってしまった眼を開いてみると、そこにはより広い普遍的な知の様式が広がっていた。
3 客観性	ロレイン・ダントン、ピーター・ギャリソン	大庭 良介	科学といえば客観性。でも客観性ってなんだろう？ 科学者って、実は客観性という名の『認識的徳』と呼ばれる主観的で文化的な規範に従って研究活動を実施してきたのだという。その『認識的徳』の変遷の歴史を紐解く。
4 身体論	湯浅 泰雄	大庭 良介	心身一如を前提とする東洋的身体論を、東洋哲学と西洋哲学を行き来しながら展開する。本学で長年教鞭をとられた故・湯浅先生の代表的著作。
5 現代語訳 風姿花伝 PHP研究所	世阿弥	加藤 光保	日本について考える時、シンプルに表現された世阿弥のこの本は、大変読みやすく、能楽論であるとともに、日本人の感性や美意識の特徴について考える入門書として、何度も読み返したい名著です。
6 Robbins and Cotran Pathologic Basis of DISEASE ELSEVIER SAUNDERS	Kumar, Abbas, Aster ed.	加藤 光保	これは、読んでみたらと推薦するというより、人の病気について、どのような原因でどのような異常が起こって発生するのかを知りたい時に、調べる最初の本として推薦するものです。世界中の医学生が病気のことを一番最初に体系的に学ぶ教科書で、私が編集と「腫瘍」の章の執筆で参加した医歯薬出版の『解明 病理学』も、日本のRobbinsを目指してつくられた教科書です。
7 『自我の起原——愛とエゴイズムの動物社会学』（岩波現代文庫）	真木 悠介	葛山 泰央	〈生成子たち〉の永劫の転生の旅を通して、近代的自我の「個性性」や「主体性」や「自己意識」の起原を浮き彫りにした作品。
8 『社会学入門——人間と社会の未来』（岩波新書）	見田 宗介	葛山 泰央	社会学という学問は〈関係としての人間の学〉であり、初発の問題意識に貫かれた〈越境する知〉でもあることを明快に論じた作品。
9 『パリ感覚』（岩波現代文庫）	渡邊 守章	葛山 泰央	中世以来ヨーロッパの中心として「フランスの精髓」を体現してきた都市パリを、河岸の景観や大聖堂の機能、権力装置や劇場＝文化装置、日常生活の典礼や共和国の記憶などのトピックから多面的に考察した作品。
10 『マルク・ブロックを読む』（岩波現代文庫）	二宮 宏之	葛山 泰央	リュシアン・フェブルと共に雑誌『アナール』を創刊し、現代歴史学に革命をもたらした歴史家マルク・ブロックの波瀾万丈の生涯を、その学問史上の位置づけから、主要な作品の仕組みを経て、生きられた歴史に至るまでの一貫した視座から読み解いた作品。
11 『重力と恩寵』（岩波文庫）	シモーヌ・ヴェイユ (著)、富原 眞弓 (訳)	葛山 泰央	第二次世界大戦下に34歳で夭折した哲学者の「雑記帳（カイエ）」からの断章を抜粋したもの。怯懦と妥協を許さない純粹の希求、人類共通の運命たる不幸への共苦、悲惨な状況においても絶望しない勇気の証言として、敗戦と占領の記憶に深く傷ついていたフランスの人心を鼓舞した作品。 『『今こそ死は、目（まなこ）の光を奪い去って、これまで穢した日の光も、元の如く淨らかに、澄みわたりゆく……』(ラシーヌ（作）渡邊守章（訳）『フェードル アンドロマック』（岩波文庫）からの引用)。—— わたしは消滅せねばならない。わたしの眼にするこれらの事物が、わたしの眼にする事物ではなくなることで、完璧に美しいものとなるために。』

12	離散数学への招待(上・下)	J. マトウシエク & J. ネシエトリル	古賀 弘樹	離散数学の専門書ですが、随所に遊び心が散りばめられていて、他に類を見ない本です。定理の証明も無駄なくすっきり書かれています。第2章の包除原理の3種類の証明を是非読んでください。いろいろなトピックが書いてあるので、学部1年から博士前期課程まで楽しめます。なお原著は第2版が出ています。
13	世にも美しい数学入門	藤原 正彦/小川 洋子	古賀 弘樹	「博士の愛した数式」の著者の小川洋子と数学者の藤原正彦の対談形式の本です。天才数学者が生まれる3つの条件は必読で、個人的には数学者に限らなくてもいいように思えます。「博士の愛した数式」を先に読むとより楽しめます。映画「奇蹟がくれた数式」でドラマジャンを知るともっと楽しい。数学者でない私だから言えることなのかも。
14	Black Box Thinking: Why Most People Never Learn from Their Mistakes - But Some Do (原題) 失敗の科学 失敗から学習する組織、できない組織	Matthew Syed 有枝 春 (訳)	粉川 美踏	「若い頃はどんどん失敗してもいいんだ」とよく言われますが、やっぱり失敗は嫌ですよね。この本の著者は、失敗から学ぶ事こそが文化や技術の発展に寄与してきた、と主張しています。つまり、失敗を避ける人はたくさんのチャンスを逃している。この本を読んだからといって失敗が怖くなくなったわけではないですが、ちょっと意識的に挑戦をしてみるようになったと思います。
15	リサーチの技法	ウェイン・C・ブース [ほか] 著 ; 川又 政治 訳	鈴木 大地	リサーチのスキルは、大学生や大学院生、研究者としてだけでなく、大学を卒業したあとの社会人としてもきわめて重要である。本書は、リサーチの意義から始まり、問いの発見や課題の設定、文献やデータベースの調査、議論の組み立て、報告書の執筆などの方法を体系的に解説する。文系理系を問わず、すべての大学生におすすめしたい一冊。
16	哲学しててもいいですか? : 文系学部不要論へのささやかな反論	三谷 尚澄	鈴木 大地	「役に立たない」学問の筆頭 (!?) である哲学と、哲学を教育することの社会的意義が、軽妙な文体で論じられる。「臆病な悟りの文化」や「ことなかれの優等生主義」に生きる現代の若者についての論評は、学生の耳に痛いかもしれない。国立大学の現状や大学教員の業務についても論じられるので、学生とは別の視点から大学について考える材料にもなる。
17	大衆の反逆	オルテガ・イ・ガセット 著 ; 佐々木 孝 訳	鈴木 大地	哲学者オルテガが、他人と同一であることに快感を覚え成り行きまかせで生きる凡俗な人々 = 大衆を批判する書。科学者や医者、技師といった専門家も、細分化された領域に閉じこもり、世界の運命について少しも考えずコミットしようとする点で、むしろ大衆の典型である。世界がポピュリズムに席卷されつつある今こそ読み直したい名著。
18	大学の使命	オルテガ・イ・ガセット 著 ; 井上 正 訳	鈴木 大地	『大衆の反逆』で現代社会にはびこる大衆を批判した哲学者オルテガによる大学論。大学は哲学者ヤスパースが『大学の理念』で論じたようなエリート教育の場ではなく、平均的な人々が「大衆化」せず、混沌であり密林である生に「道」を見出そうと努力するための諸理念の体系 = 教養を身につけるための場であるとオルテガは論じる。
19	歴史としての学問/パラダイムと科学革命の歴史 ※タイトルは異なるが、中身は同じ	中山 茂	鈴木 大地	科学を含めた学問の歴史が、東洋と西洋の文化比較から論じられる。端的に言えば、東洋の学問は記録的 (書かれた文化)、西洋の学問は論争的 (話す文化) なのだという。西洋での筆記試験の実施には中国の科学の影響があったという興味深い指摘をはじめ、細かい記述も読んでいて楽しい。
20	生物学者のための科学哲学	コスタス・カンブラーキス, トビアス・ウレル編 ; 鈴木大地 [ほか] 訳	鈴木 大地	(科学) 哲学は、生物学などの理系分野を学んだり研究したりするうえでも実際に役に立つ。本書では、「科学的説明とは何か」「科学における概念の役割とは何か」といった科学哲学における重要な問題が、生物学での実例と関連づけて議論される。科学と哲学の関わりを知るための最初の一冊としてぜひ。
21	動物意識の誕生 : 生体システム理論と学習理論から解き明かす心の進化 (上・下)	シモーナ・ギンズバーク, エヴァ・ヤブロンカ著 ; 鈴木大地 訳	鈴木 大地	意識については、数多くの哲学者や科学者が頭を悩ませてきた。本書は、アリストテレスから始まる哲学、心理学、生物学、神経科学などの古今の議論を総動員しつつ、独自のアプローチで意識の進化を解明しようと試みる。学際的な研究の例として特に優れた著作。
22	数学の認知科学	G.レイコフ, R.ヌーニエス 著、植野義明、重光由加 訳	鈴木 大地	高度に抽象的な数学も、実はヒトの身体性や脳の特성에基づくメタファー思考の産物である。あのオイラーの公式すら、そうしたメタファーの組み合わせで成り立っているのだ。数学観が大きく変わる一冊。
23	利己的な遺伝子	リチャード・ドーキンス 著)、日高敏隆、岸由二、羽田節子、垂水 雄二 訳	鈴木 大地	「種の保存」という考えは、現代の進化生物学からすると誤りである。自己を犠牲にして他個体を利するようみえる行動も、遺伝子のレベルで見れば、自己の遺伝子を拡散させるのに役立つ。進化理論の核心を鮮やかな筆致で描き出す、進化生物学者で稀代のサイエンスライター、リチャード・ドーキンスの主著かつデビュー作。
24	眼の誕生 : カンブリア紀大進化の謎を解く	アンドリュウ・パーカー 著、渡辺政隆、今西康子 訳	鈴木 大地	約5.4億年前のカンブリア紀に、動物は爆発的に多様化した。現代の主要な動物群はこのときすでに揃った。本書の著者アンドリュウ・パーカーによれば、その原因は、外界を映像として捉える眼の獲得にあったという。まるで推理小説のように、大きな謎が画期的な仮説で読み解かれる刺激的な科学本。
25	博士になったらどう生きる? - 78名が語るキャリアパス -	栗田 佳代子 吉田 類	棚橋 沙由理	ポストク問題、高学歴ワーキングプア - 現代に生きる若手研究者の多様な道のりをたずねる本。七十八人七十八色の人生から、ユニークな人柄も感じることができます。研究者をめざすめざさないに関わらず、ライフプランの参考にしてみたいかがでしょうか。悩んだとき迷ったときの一冊してもどうぞ。
26	歴史でわかる科学入門	ウィリアム・F・バイナム	棚橋 沙由理	高校で学ぶ理科は物理、生物、化学そして地学ですが、それぞれのディシプリンはどのように深化してきたのでしょうか。この本では、「科学」という概念が成立するはるか以前の古代から現代までの科学の変遷について、その時代の「科学者」にスポットを当てながら触れていきます。日本でもよく知られる中東・中国ないしインドの古代文明に芽吹いた科学の片鱗や伝統医学あるいは古代ギリシャの原子論や天動説。1章が数ページ程度ですので、毎晩1章ずつ読み進めることができます。
27	教え学ぶ技術 - 問いをいかに編集するのか	苅谷 剛彦、石澤 麻子	坪内孝司	オックスフォード大学の現職教授である苅谷剛彦先生が、同大学の学生である石澤麻子さんとの間で、オックスフォード大学で行われているチュートリアル学修の方法を実践しながら日本語で紹介した書籍。本学の学士課程高年次ではお手本にしたい、オックスフォード大学で行われているチュートリアル学修の実際を知ることができる本。 <a href="https://www.chikumashobo.co.jp/product/9784480072498/">https://www.chikumashobo.co.jp/product/9784480072498/</a>

28	『Transformation by Designデジタルトランスフォーメーションに挑戦するデザイン戦略とサービスブランニング』	富士通	坪内孝司	「創造的デザイン思考」の考え方の定義を捜し歩いていた時に出会った本。デザイン思考とは何か？という問いに答えてくれる内容を含む、が、デザイン思考の定義は山ほどあって、この本に書かれている内容が唯一解、というのではないだろう。でも参考にはなる。 <a href="https://www.fujitsu.com/downloads/DESIGN/document/transformationbydesign-jp.pdf">https://www.fujitsu.com/downloads/DESIGN/document/transformationbydesign-jp.pdf</a>
29	失敗百選シリーズ（全3巻） 失敗百選／ 続 失敗百選／ 続々 失敗百選	中尾 政之	坪内 孝司	世の中に発生した様々な事故は、41の原因類型からなる、と喝破した本。世の中に知られた大事故を取り上げて、その原因を解題している。事故を含め、日常の身近でも起きる失敗には因果関係がある。失敗したとき、原因を推定することはよくやるが、さらに一步転じて、日常の失敗につながりそうな原因をみつけて転ばぬ先の杖を身につけ失敗（事故）の回避をすることは、様々な損失を低減するために必要なことである。本書は、そのような転ばぬ先の杖を思考の中に取り入れることに役立ちそうな本。工学を志す人には特にお勧めかもしれない。 <a href="https://www.morikita.co.jp/books/mid/066471">https://www.morikita.co.jp/books/mid/066471</a>
30	ホンダジェット 開発リーダーが語る30年の全軌跡	前間 孝則	坪内 孝司	あの自動車メーカーのホンダが、ビジネスジェット機を開発して販売するまでの軌跡をルポした本。事業としての成立性と、技術開発のロマン？の両立をいかにして開発と実用化をなしたか、を垣間見ることができる。主翼の上にエンジンを立てるアイデアも斬新だが、そのアイデアに行きつくプロセスも紹介されている。技術者を目指し、その開発したものが世の中で使われることに喜びを感じたい人ならきっと面白いと思う。 <a href="https://www.shinchosha.co.jp/book/100431/">https://www.shinchosha.co.jp/book/100431/</a>
31	未来職安	柞刈 湯葉 (いすかりゆば)	坪内孝司	近未来小説。ベーシックインカムが導入され、普通の生活なら労働をしなくても済む社会に生きる一人の女性が主人公。AIやロボットが当たり前になった生活に溶け込み、極めて高い生産性のある企業によって社会経済が成り立っている世界をシュールに描いている。近い将来にこんな社会がよいのか望まないのか、それを考えるのに役立ちそうなフィクション。 <a href="https://www.futabasha.co.jp/book/97845755244060000000">https://www.futabasha.co.jp/book/97845755244060000000</a>
32	もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの「マネジメント」を読んだら	岩崎 夏海	坪内 孝司	ピーター・F・ドラッカー（1909-2005）は、「知の巨人」「マネジメントの父」と称される経営思想家。会社経営やマネジメントに関する著書が多数ある。 <a href="https://drucker.diamond.co.jp/works/index.html">https://drucker.diamond.co.jp/works/index.html</a> その代表的名著が「マネジメント」。岩崎夏海は、高校の弱小野球部の女子マネージャーがこの名著「マネジメント」を読んで目覚め、甲子園に出場するまでを青春小説として描いた。楽しみながら読めるストーリーの中にドラッカーの名著の真髄をはめ込んだ巧著だと思う。リーダーシップをとるにはこれか！と思った本。通称「もしドラ」。これを読んで予備知識を仕込んでからドラッカーの名著に挑戦してはいかがでしょう？ <a href="https://www.diamond.co.jp/book/9784478012031.html">https://www.diamond.co.jp/book/9784478012031.html</a>
33	もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの「イノベーションと企業家精神」を読んだら	岩崎 夏海	坪内 孝司	「もしドラ」の著者が、ドラッカーのまだある名著「イノベーションと起業家精神」の真髄をはめ込み、「もしドラ」の続編として出版したベストセラー。これもまた面白かった。通称「もしイノ」。こちら「もしドラ」とともに、目標への挑戦やそれを目指すリーダーシップとは何かを考えせられた。これも読んだら、またドラッカーの名著に挑戦、できるかな？ <a href="https://www.diamond.co.jp/book/9784478066492.html">https://www.diamond.co.jp/book/9784478066492.html</a>
34	数学30講シリーズ（全10冊） 微分・積分30講／線形代数30講／ 集合への30講／位相への30講／解析入門30 講／複素数30講／ベクトル解析30講／群論へ の30講／ルベグ積分30講／固有値問題30講	志賀 浩二	坪内 孝司	このシリーズで最初に出会ったのは、「ルベグ積分30講」。ルベグ積分など習ったことがなかった私が、当時助手として赴任した大学で、いきなりこれを含む演習の担当を命ぜられて途方に暮れ、さらにその時指定された教科書（伊藤清三「ルベグ積分入門」）を読んでもよくわからずさらに途方に暮れた時に出会った。この本の書きぶりがとても気に入り、全10巻すべてを手元にそろえた。シリーズのどれも語り口が柔らかく、しかし決して甘くはなく、しかも大学の理工学関係の学科では初年級で学修することが多い基礎的な数学それぞれの「しらべ」がわかってくる名著だと思う。 <a href="https://www.asakura.co.jp/nl/series0101.html">https://www.asakura.co.jp/nl/series0101.html</a>
35	大人のための数学シリーズ（全7巻） 1数と量の出会い／2変化する世界をとらえる／3 無限への飛翔／4広い世界へ向けて／5抽象への 憧れ／6無限をつつみこむ量／7線形という構造 へ	志賀 浩二	坪内 孝司	数学30講シリーズにはまって、志賀先生の著作を調べていて出会ったのがこのシリーズ。数学30講シリーズ同様、柔らかな語り口でありながら、数学の体系をしっかりとと味わいで、それぞれのトピックスを解説する筆致に感銘を受けた。理工系の大学の初年級の数学を知っていれば読めてしまう。講義に使われるような教科書を読んだだけでは気づけない面白さを感じた大人向けの数学解説。これも名著だと思う。
36	夢の色、めまいの時	大林 宣彦	坪内 孝司	映画監督の大林宣彦が、尾道3部作や新尾道3部作を撮って間もないころの出版で、いささか古く絶版本ではあるが、大林映画をよく観ていた大学院生だったころに読んで今でも印象に残っている。「減点法ではなく得点法で考える」という一節が当時の私に刺さり、今でも刺さっている。表面的には様々な俳優とのエピソードや映画の制作秘話が内容ではあるが、この映画監督の映画作家としてのこだわりや、映画の撮影クルーに対するリスペクトとリーダーシップのありようを深読みすると、おのずから大林監督の人生訓が見えてくる気がした。それも、今の自分の生き方に多少なりとも影響を与えている。
37	数学する身体	森田 真生	坪内 孝司	第15回小林秀雄賞受賞作。著者の森田氏は、特定の組織には属していない独立研究者。研究を続けながら、数学にまつわるライブ活動や著作をしている。数学の本といえば、数式の羅列や理論の解説か、という印象もあるが、人と数学とのかわりを深く論考した本である。数学に対するこのような光の当て方も、数学の問題をたくさん解いてきた経験からすると新鮮なのではないだろうか？ <a href="https://www.shinchosha.co.jp/book/339651/">https://www.shinchosha.co.jp/book/339651/</a>

38	<知の三部作> (全3巻) 知の技法／ 知の論理／ 知のモラル	小林 康夫 船曳 建夫編著	坪内 孝司	「知の技法」は東京大学教養部で1993年度から文科系（文I, 文II, 文III）の1年生を対象として開設されている必修科目「基礎演習」のサブテキスト。「知の技法」出版直後から反響を呼び、「知の技法」には織り込めることのできなかった内容を含め編まれたのが「知の論理」と「知のモラル」。出版から30年たち、「知の論理」と「知のモラル」は新装版が昨年出版された。東京大学の教授陣が執筆した論考が集められている本でありが、その内容はやや難解かもしれない。しかし、それを丁寧に読み解きながら、critical thinking をしながら「知」というものがなにか、大学での学問とは何かを掘り下げて考えてみようとするなら、これらの本をまず読んでみて、そこから始めてみることも一考かもしれません。 <a href="https://bunkyo.repo.nii.ac.jp/record/3940/files/BKSF010013.pdf">https://bunkyo.repo.nii.ac.jp/record/3940/files/BKSF010013.pdf</a>
39	弥生人はどこから来たのか—最新科学が解明する先史日本	藤尾 慎一郎	坪内 孝司	考古学といえば文科系の学問のような印象をもつが、炭素14年代測定法や酸素同位体比年輪代、DNA解析やレプリカ法など、最新の自然科学的（理科学的？）手法によるエビデンスをもって、弥生時代の人々の生活を描き出していることに感銘を受ける。まさに、考古学と自然科学のカップリングによる学際研究の最前線を紹介する本（2024年3月新刊）。文系・理系の垣根を超える、トランスボーダーな学問分野の例としても興味深いが、様々な証拠を組み合わせ、いくつも立てられる仮説から、証拠に矛盾する仮説を排除して、残る仮説からあり得る姿を推理していく様に学問の醍醐味を感じて面白い。2024年4月現在、私も読んでいます真っ最中！ <a href="https://book.asahi.com/article/15216515">https://book.asahi.com/article/15216515</a> <a href="https://www.yoshikawa-k.co.jp/book/b10045004.html">https://www.yoshikawa-k.co.jp/book/b10045004.html</a>
40	オイラーの贈物 新装版: 人類の至宝 $e^{i\pi} = -1$ を学ぶ	吉田 武	坪内 孝司	この本のハイライトは、オイラーの公式 $e^{i\pi} = -1$ の導出である。そして、その導出は第8章の1ページで終わる。第1章から第7章までは、その導出のために費やされるが、他の書籍の参照はせず、高校数学の知識があれば読める内容になっている。言い換えれば、第7章までの記述が、オイラーの公式を導くすべての知識となる。この1冊で、数学の理論体系の構造の例がわかるし、一つ一つの定理を導出する過程そのものが極めて重要であることもわかる。論理的思考能力を養うのにもこの1冊をじっくり読むことが良いのではないかと思う。
41	物理学とは何だろうか 上・下 (岩波新書)	朝永 振一郎	中務 孝	読み終わった時に、この続きを読みたいと思わせる未完の名著。物理学を定義することは不可能けれども、無定義のものを語るこの本全体で「物理学とは何だろうか」の答にするという、禅問答かというような書き出しで始まるが、歴史書を読むように引き込まれる。
42	ランダウ=リフシッツ理論物理学教程「力学」(東京図書)	ランダウ・リフシッツ	中務 孝	物理初学者の誰もがショックを受ける教科書。わずか10ページ程度の第1章を読み切れる大学1年生が果たしているのか。自分は2、3ページで挫折した。朝永の教科書と正反対、物語として引き込まれる面白さはないが、あらゆる無駄を削ぎ落としてエッセンスだけにすると力学ってこうなるんだろうって思う。挫折の味を知りたい1年生に。
43	プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神 (岩波書店)	マックス・ウェーバー (大塚久雄訳)	山中 弘	本書は、ウェーバーの膨大な業績の中で最も著名なもので、宗教社会学の古典的名著です。資本主義という経済体制の形成過程に、一見すると全く関係のないように見える宗教的信仰が深く関与していたとする本書のウェーバーの大胆な仮説は、学問的な推理小説を読んでいるような知的興奮を覚える著作です。決して読みやすい文体ではありませんが、是非、一読してほしい著作です。
44	社会科学の方法—ウェーバーとマルクス (岩波新書)	大塚 久雄	山中 弘	著者の大塚久雄さんは日本のウェーバー研究の第一人者の一人です。本書は、理論的にも実践的にもウェーバーの対極に位置するカール・マルクスと比較しながら、ウェーバーの理論的立場を解説し、そもそも社会科学という方法論がどのようなものなのかを平明な文体で述べた古典的な入門書です。
45	マックス・ウェーバー入門 (岩波新書)	山之内 靖	山中 弘	社会学の学問的歴史に大きな足跡を残したウェーバーには、その業績を解説した数多くの入門書が出版されています。ウェーバーのどの入門書を読んでも構いませんが、比較的新しく手に入りやすく本書を読んで、ウェーバーの学問的世界を味わってみるのもいいかもしれません。
46	情報理論 (ちくま学芸文庫)	甘利 俊一	面 和成	情報理論を分かりやすく教えてくれる貴重な一冊です。数式が出てきますが、情報の本質を教えてくれる書籍であり、最初の部分を読むだけでも価値があります。
47	無限論の教室 (講談社現代新書)	野矢 茂樹	面 和成	数学の楽しさを教えてくれる貴重な一冊です。こういうふうな数学を伝える方法があるのかと感心しました。
48	化学者たちの感動の瞬間：興奮に満ちた51の発見物語(化学同人)	有機合成化学協会 編	一戸 雅聡	第一線で活躍する化学者が、どういう思いで研究に取り組み、どういっかけて新たな発見につながったのかを自身の言葉で紹介されている短編集。
49	ドラマチック有機合成化学：感動の瞬間100 (化学同人)	有機合成化学協会 編	一戸 雅聡	第一線で活躍する有機合成化学者が、どういう思いで研究に取り組み、どういっかけて新たな発見につながったのかを自身の言葉で紹介されている短編集。
50	あなたは嫌いかもしれないけど、とってもおもしろい蚊の話 (山と溪谷社)	三條場 千寿 比嘉 由紀子 沢辺 京子	棚橋 沙由理	皆さん、蚊はお好きですか？ 刺されると痒くてたまらないし、その上、危険な病原体を媒介する。そして、羽音。あれは邪悪そのもの。おまけに素早い。私は苦手です。 ところが、視点を変えてみると。蚊の口吻（血を吸う口）はとても巧妙につくられていて、痛くない注射針開発に貢献しています。共生細菌や遺伝子組換えによる生物学的防除への期待も。一読すれば、蚊へのリスペクトが高まること間違いなし。蚊の研究者が蚊への愛を熱く語る一冊。

51	数学のための英語案内	野水 克己	古賀 弘樹	私が大学院生の頃、英語で論文を書くときに一番参考にした本です。英語で論文を書くための本は数あれど、専門分野が違ふとかなり読みにくいもの、本書は、主として高校・大学初年度の数学から題材が選ばれているので、（著者は数学者なので、少々難しい数学の言葉も出てきますが）理系の人なら読みやすく感じるとと思います。英文の修正例も多く載っています。最後の章には、「アメリカにおける推薦状の読まれ方」も書いてあり、ここだけでも読み物としても楽しめます。大学1年生から大学院生博士後期課程まで、広く推薦したい本です。すでに絶版ですが、古本屋では高値がついていたりします。
52	トコトンやさしい暗号の本	今井 秀樹監修 伊豆, 岩田, 佐藤, 田中, 花岡著	古賀 弘樹	一目すると、技術の入口をわかりやすく書いた、よくある本に見えるかもしれませんが、この本に限っては、著者は、5人とも第一線で活躍する暗号の研究者だったりします（1名の方には、以前、本学の非常勤講師をお願いしていました）。インターネット社会において欠かすことのできない暗号技術を、多岐にわたって解説した本です。全部読むのはなかなか大変ですが、パラパラとめくって、興味をもったところだけでも、読んでみてください。
53	フラクタル数学	石村貞夫 石村園子	古賀 弘樹	フラクタルは、複雑そうに見える図形ですが、同じ写像を繰り返し適用することで得られる、自己相似性と言われる性質をもつ図形です。自然界でも、フラクタル性をもつものは多数あるとされています。本書は、フラクタルが日本でも注目を集め始めた1990年に出版されました。本書は、見開きで、左ページに本文を、右ページに図を、それぞれ配置した画期的な体裁になっていて、読みやすく書かれています。第3章のサンプルプログラムが、いまどきのPython等でなく、BASICなのはご容赦を！時間が経っても変わるものと変わらないものがあることを感じさせる本でもあります。
54	ポスト・コロナ学	秋山 肇（編）	秋山 肇	新型コロナのパンデミックにより、社会で変化したことは何か。また、変わらずに重要であるものは何か。従来の前提が問い直されるなか、学際的アプローチにより社会の変化と連続性の双方に着目し、ポスト・コロナの社会のあり方を構想する。異なる分野を研究する筑波大教員による共著書。
55	大学教育について	J. S. ミル	秋山 肇	大学教育のあり方について、職業教育ではなく、専門知識を通して、一般教養を修める重要性について論じた書籍。多様な視点を持ちつつ学ぶことの重要性が説かれている。
56	システムの科学（パーソナルメディア）	ハーバート・A. サイモン	事務局	原題は「人工物の科学」。人間が、限られた能力の中、多様性に満ちた環境に適應して目的を達成するために、どのように人工物＝物体だけでなく、組織や社会、文明まで含めた人工システムをデザインしてきたのか。コンピューターサイエンスと心理学を専門とするノーベル経済学賞受賞者による、自然科学から経済学、社会学、デザイン論など幅広い視点からの考察です。多様化、複雑化する問題に直面したときも、思わぬ角度から気づきを与えてくれます。
57	非営利組織の経営（ダイヤモンド社）	P. F. ドラッカー	事務局	マネジメントの父と称される著者によるミッション遂行のための理論が凝縮された一冊です。ボランティア活動で悩んだ時に会った本ですが、どんな組織にも当てはまることばかり！人生の経営においても羅針盤となること間違いなし。
58	選択の科学（文藝春秋）	シーナ・アイエンガー	事務局	結婚相手は自分が選べないほうが幸せ！？人生は日々の選択の積み重ね。何かと選択肢が増えていく現代、どのような選択肢があることが生物にとって幸せなのか？コロンビア大学ビジネススクール教授が、20年以上の実験と研究に基づき、「選択」をめぐる生物の本能に迫ります。盲目で移民という自身の過酷な状況も「選択」によって乗り越えたという著者の研究は、NHKの「コロンビア白熱教室」でも大きな話題になりました。
59	くららとお日さま（早川書房）	カズオ・イシグロ	事務局	AIを搭載したロボットによる人間観察を通して、愛と妄信を静かに描いています。友情の物語が警鐘か…。日本とイギリスの二つの文化を背景にもつノーベル文学賞を受賞者による感動作として注目を集めた本作は、AIと人間の未来の関わり方についても多様な見方ができる作品です。
60	建築探偵の冒険（筑摩書房）	藤森 照信	事務局	日本を代表する建築家で建築史家の著者による、街に息づく面白い話の発掘記。自分の目で見て、足で歩いてこそ体験できる、建築と歴史、文化、地理等、都市を構成する点と点がつながるワクワク感がたまらない一冊です。これを読んだらもう、何も観ずに道を歩くことはできなくなるでしょう。
61	柔らかな個人主義の誕生（中公文庫）	山崎正和	土井 隆義	いま私たちはどんな社会を生活しているのでしょうか。私たちはみんなこの社会の一員ですから、そんなことは改めて問われなくても知っていると思われるかもしれませんが、でも、それは大きな間違いです。私たちの目には、太陽が地球の周りを回っているように見えます。しかし実は逆ですね。私たちと社会との関係についても同じことが言えます。いま自分が立っている地平とはいったいどのようなものなのか、改めて考えるための入門書として相応しい一冊です。何よりも知的エンタテインメントに満ちた書物ですので、ぜひ手にとってその華麗なる論理展開を楽しんでください。
62	発想する会社! — 世界最高のデザイン・ファーム IDEOに学ぶイノベーションの技法（早川書房）	Tom Kelley, Jonathan Littman 著 鈴木 主税 訳	山田 博之	デザイン思考を世界に広めたデザインファームIDEOの活動を、同社の共同経営者であるトム・ケリー自らが執筆した書籍。デザイン思考とは何かという問いに対して、現場に行って自分の目で見て確かめる事や、とりあえず何か作ってみてから議論するという「デザイン」という行為の本質を、実際の業務を通して解説した貴重な一冊です。机にかじりついているだけではなく、一歩踏み出して外に出ることの重要性を感じ取って頂ければと思います。
63	測りすぎ：なぜパフォーマンス評価は失敗するのか？（みすず書房）	ジェリー・Z・ミュラー 著 松本 裕 訳	鈴木 大地	受験戦争、GPA、大学ランキング、インパクト・ファクター……現代社会では、点数づけによる評価がはびこっている。だが、測定のメリットは確かにコストを上回っているのだろうか。測定のための測定、手段のための目的、「やってる感」だけの自己満足に陥ってはいないだろうか。原著タイトル「The Tyranny of Metrics」のとおり、本書は測定による業績評価の暴虐の支配に一石を投じる。

64	実力も運のうち：能力主義は正義か？ (早川書房)	マイケル・サンデル 著 本田 由紀、 鬼澤 忍 訳	鈴木 大地	「自分が良い大学に入れたのは、ひとえに自分の能力がすぐれていたから」なのだろうか？ そのような能力主義は、「勝ち組」を驕り高ぶらせ、「負け組」に劣等感を植え付けて、格差を助長して対立を煽る。だが成功の背景には、良い環境に恵まれるなどといった「運」の要素が多分に含まれている。「ハーバード白熱教室」で有名な哲学者、マイケル・サンデルは本書で（原著のタイトルは「The Tyranny of Merit」）、公平な社会をめざして、能力主義に支配された現代社会に警鐘を鳴らす。
65	セレンディピティ：思いがけない発見発明のドラマ (DOJIN文庫)	ロイストンMロバーツ 著；安藤 喬志 訳	庄司 光男	科学的発見に至るエピソードは、ドラマチックで大変面白い。科学の理路整然とした側面とは全く異なり、とても身近に感じられるようになるし、発見時の予想もしなかったことから見つかるその意外さに読んでいてワクワクが止まらない。広い分野の事例が紹介されているので、興味関心が深まること間違いない。
66	生きのびるためのデザイン (晶文社)	ヴィクター・パパネック	原 忠信	広告や商業的デザインの害悪を語るという書き出しは、華やかなデザインの世界に憧れていた一学生にとって衝撃的だった。エシカルデザインやソーシャルデザインといった言葉がまだ存在しなかった50年前に、デザインの社会的役割について語られており、今こそその言葉がひととき強い輝きを放っている。
67	人間の本質にせまる科学：自然人類学の挑戦 (東京大学出版会)	井原 泰雄 梅崎 昌裕 米田 稜 編	板橋 悠	人類を研究する人類学は内実として人文学に根差す文化人類学と生物学の一分野である。自然人類学に分かれており、文理の隔たりが大きい日本の学術界においても両分野は別個の集団を構成している。本書は後者によって行われた東大の講義を書籍化したもので、自然人類学について学部生向けに分かりやすくまとめている。本書のタイトルの一部に採用された「人間の本質」という言葉は文化人類学と自然人類学、あるいは人文学と自然科学の思考の違いを端的に表している。「人間の本質」を学問は捉えることができるのか？そもそも「すべての人に統一的な性質」など存在するのか。本書によって最新の成果や動向を知るだけでなく、研究者の文化の差異や多様性を感じることもできる「人類学の入門書」となっている。
68	歴史は実験できるのか：自然実験が解き明かす人類史 (慶應義塾大学出版会)	ジャレド・ダイヤモンド、 ジェイムズ・A・ロビンソン 編	板橋 悠	本書は『銃・病原菌・鉄』がベストセラーとなったジャレド・ダイヤモンドが編者を務めている。ダイヤモンドは生物進化学者として鳥類の研究に訪れたニューギニアでの経験から人類学的研究も行うようになり、その成果の一部をしたためた物が上述の『銃・病原菌・鉄』である。本書はタイトルの通り、歴史学がそのアプローチとして「実験」を行うことができるのかを論じるため、その実例として実験を活用した8つの実験的歴史学研究をまとめた論集である。「歴史学は実験できない」、「反証可能性がないから科学ではない」というのは、とすれば理系（特に学問への自信を持ち始めた学部生や修士学生）から聞かれがちな言い分である。これに対する反応は歴史学の中でも分かれており、「歴史学も科学的である」という者もいれば「そもそも歴史学はscienceではなくartであり、批判が的外れである」とする者もいる。本書は前者の立場に立つ歴史学者や考古学、政治学などの関連分野の研究者による反論である。本書では、歴史学の対象である「過去の社会やイベント」のように、パラメーターを操作した再現ができない対象での比較検証を「自然実験」と呼んでいる。本書の定義する「実験」に違和感を覚える読者もいるだろうし、歴史学の中にも本書の考えに反発するグループがいるだろう。本書の主張がステレオタイプを覆し、正しい歴史学の在り方を提示したとは言わない。しかし文系の学生はもちろん、理系の学生にも本書を手にとってもらい、「科学」は理系・文系の枠を超えるのか、超えるべきなのかを考えるきっかけとして欲しい。
69	ユニバーサルデザインの考え方： 建築・都市・プロダクトデザイン (丸善出版)	田中 直人	山田 博之	「桑沢デザイン塾」で行われたセミナーをもとにした書籍で、少し古いですがユニバーサルデザインの哲学について触れることができる一冊です。実践としてのユニバーサルデザインとはどういうものかという事に対して、実例を通じた地に足のついた議論が行われています。
70	インタフェースデザインの心理学 第2版 — ウェブやアプリに新たな視点をもたらす100の指針 (オライリージャパン)	Susan Weinschenk (著), 武舎 広幸 武舎 るみ 阿部 和也 (翻訳)	山田 博之	デザインの分野ではセンスや感性が取り上げられがちですが、実務を行う上でセンスだけに頼るのは、博打をしているのと同じです。「論理的なデザインとは何か」を考える上で、人間の思考や行動を心理学や感性科学の立場から切り取って検証する事例が数多く示されています。デザインには興味の無い、もしくは自分には関係ないと思っている人にもぜひ読んでほしい、非常にためになる1冊だと思います。
71	世界に学ぶ自転車都市のつくりかた (学芸出版社)	宮田 浩介	原 忠信	気候変動対策として、また健康で安全、楽しく暮らしやすい都市を実現するため、世界各地で「クルマ中心」から「人間中心」へのまちづくりのソフトが進められています。本書は、その動向を豊富な事例とともに紹介してくれます。コペンハーゲンやアムステルダム、パリ、ニューヨークなど、世界の先進事例とともに、「15分都市」「ビジョンゼロ」「All Ages and Abilities」といった重要キーワードが網羅されています。圧巻は最終章の「デザインカタログ」。オランダのCROWや北米のNACTOなどを参考に、日本の現状を踏まえた具体的な提案が展開され、実践のヒントが満載です。——読むと視点が変わる、行動を後押しする一冊です。
72	生命とは何か：複雑系生命科学へ (東京大学出版会)	金子 邦彦	庄司 光男	生命は進化や適応といった驚異的に優れた特性を持っている。複雑系である生命システムでは、ミクロな揺らぎがマクロな安定性につながっている。物理や数理の観点から生命システムについて議論がなされており、生物物理的に生命を探求した名著である。
73	普遍生物学：物理に宿る生命、生命の紡ぐ物理 (東京大学出版会)	金子 邦彦	庄司 光男	生物に共通する性質は何か、について探求しており、細胞レベルから個体レベルまで取り扱うことで、隠れた数理現象について解説されていく。生命現象の根幹にある物理および数理の面白さに気がつくことができる優れた書籍である。
74	風が強く吹いている (新潮社)	三浦 しをん	浦山 俊一	「行きなさい！！ 誰かのためじゃない 自分自身の願いのために！」
75	ワセダ三畳青春記 (集英社)	高野 秀行	浦山 俊一	こんな人生を送りたい！

76	ラディカント グローバリゼーションの美学に向けて (フィルムアート社)	ニコラ・プリオー	杉崎 広空	グローバル化し多様なイメージやモノが氾濫する現代をどのように読み取ればいいのか。異なる文化や時代を横断しながら、新たな意味や関係性を探る思考を学べる一冊。
77	空間の詩学 (筑摩書房)	ガストン・バシュラール	杉崎 広空	家や部屋、引き出しといった身近な空間を通して、人間の記憶や想像力の働きを探る一冊。空間を詩的に読み解く視点を学び、空間や日常の見方を豊かにしてくれる。
78	思考の整理学 (筑摩書房)	外山 滋比古	坪内 孝司	本学の前身の前身である東京文理科大を卒業し、本学の前身である東京教育大でも教鞭をとられたことのある、本学にもゆかりの深い外山滋比古先生の著書です。新聞の第1面の下に三八 (さんやつ) と言われる書籍の広告が掲載されていますが、毎回、「〇〇大学で一番読まれた本」、という触れ込みでしばらく紹介されていたので、書名はご存じの方も多いでしょう。冒頭、「グライダー人間」になるより「飛行機人間」になれという比喻に一気に引き込まれます。この本の出版は1983年で私が大学院に入った年、その当時にすでにコンピュータの利用が当たり前になる時代を予見し、その時代でも創造性を発揮できるだけの人物になるにはどうしたらよいか、というのが本書のテーマです。文理横断の考え方も示されており、本学における「学際」の考え方にも通じています。また、自分の探究テーマにつながる記事などを見つけた時、それをどのように保存して、その後の知識としてどう役立てるのか、その実践方法も具体的に示されていて、目から鱗の話満載でした。ちなみにこの本は、盛岡にある「さわや書店」の店員さんが2007年に手書きPOP「もっと若い時によんでいれば…」を出したところからブレイクし、出版後20年以上経ってからの売れ筋ロングセラーになった、という逸話もあります。その逸話については、そのPOPを書いたご本人が著者の松本大介「本屋という「物語」を終わらせるわけにはいかない」 <a href="https://www.chikumashobo.co.jp/special/sawayabooks/">https://www.chikumashobo.co.jp/special/sawayabooks/</a> をも参考にしてください (そのPOPもこのURLからたどれます)。こちらは地方都市の書店の書籍販売の苦労と工夫と情熱がよくわかるという意味でもこれまた面白い内容でした。

(参考) 大学新聞 (令和7年4月発行 10-11面) に掲載された学群長が紹介した図書

<https://www.tsukuba.ac.jp/about/public-newspaper/pdf/387.pdf#page=9>